

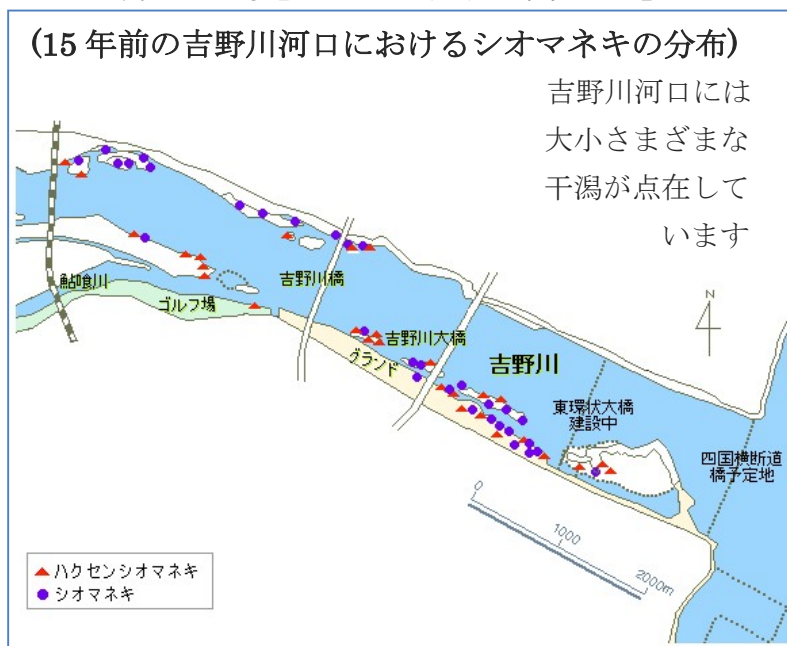
■吉野川しおまねき探検隊の調査の意味

シオマネキ(写真左)とハクセンシオマネキ(写真右)は、環境省のレッドリスト(2006)において「絶滅危惧Ⅱ類(VU)」となっています。



吉野川河口におけるシオマネキとハクセンシオマネキの市民調査から、シオマネキは吉野川河口から14.5km遡った第十堰までの汽水域のうち、10.5kmの地点まで生息が確認できました。しかも、その個体群の生息数も安定しており、ハクセンシオマネキと同程度に生息地の空間的広がりをもっていることがわかっています。

わが国においては、ハクセンシオマネキの方が地理的分布は比較的広く、それに比べてシオマネキの分布は限られており、シオマネキの生息地は貴重であるとされています。吉野川では、シオマネキは、私たちが予想していたよりも広い範囲に生息していましたが、河口域にまんべんなく



生息しているわけではありません。よく見ると、護岸工事が施されている場所には、シオマネキはほとんど生息しておらず、ヨシ原がよく残っている地域に分布が片寄っている事がわかります。しかもその分布は、干潟でも上部のヨシが生えているゾーンが中心である事がわかりました。しかし、こういった場所は、埋め立てや、改修工事や、コンクリート護岸などにより破壊されやすいところなのです。

シオマネキは、干潟にヨシ原が残り、自然度が

高い河口域に見られることから、干潟や河口の自然が良好な状態で保たれているかどうかの環境指標動物になると言われています。

1994年から1996年に広く市民に呼びかけて、吉野川におけるシオマネキの分布調査をおこなった結果をまとめて徳島県立博物館の研究報告に発表しました。

シオマネキやハクセンシオマネキが生息する場所のエコトーンの様子を調査し、15年前のデータと比較することによって、ひとりでも多くの子どもたちや市民が、調査を通して環境の変化を実感するとともに、吉野川に対する関心を高めていただきたいと考えています。